

書評 石原岩太郎著『意味と記号の世界』

1983-8

橋爪大三郎

この書を通じて著者石原氏は、心理学が人間理解のための学たちにちもどるべきことを、強く訴えます。

心理学は周知のように、J. B. Watson のこのかた半世紀余にわたり、行動主義的潮流の圧倒的影響下におかれてきました。実験心理学、すなわち S-R 図式にもとづく実験動物の行動研究が主流を占め、本来の対象であるはずの人間への関心は片隅に逐われたままです。これを是正せんとする著者の企図は十分に正当なものであり、評者のみならず記号学に関心を寄せる大方の賛意をえられましょう。

ところで著者によると、行動主義心理学は「自然科学指向の帰結」(p. ii)であって、「遠くデカルトに由来」(p. 204) します。したがってこれを克服するには、「人間を自然科学的観察の対象として、物質の振舞いと同様に、客観的に、断片的に観察するのではなくて、人間の側に立場を移して、主体として世界を眺め、この眺めのなかで行動するものとして人間を理解」(p. iii) する必要が、すなわち、生命をみとめず身体を機械視した Descartes に倣うのをやめ、人間を「生命をもった能動的な存在」(p. iii) とみる必要が、あります。

人間は、意味に生き記号を駆使する存在です。著者はこの「意味と記号の世界」を人間にとどめず、次第に複雑なものに変化してゆく生命の進化に即して理解するよう提案します。この企図は目次を見れば瞭然でしょう。そこには多彩なトピックや著名な実験結果が散りばめられていますが、全体として、生命の最も端的なあり方(ネガエントロピー)から、一連の中間形態をへて、ついには人間の活動にいたるように配列されています。

この書のおもに前半は、著者多年の講義で練りあげた内容にもとづくといえます。ゲシュタルト派以来の認知心理学の成果や、動物の知恵試験、言語心理学の実験など、行動主義的正統からみればやや傍流に属する諸論が丹念に要領よく紹介されています。また後半にかけては、Üxküll や、Lorenz をはじめ

とする行動生物学の知見、類人猿の言語使用、コンピュータ言語、さらには東洋の仏教哲学など、既成の枠にとらわれない材料が豊富に盛り込まれています。2、3のささやかな不満、たとえば類人猿の言語使用の章では文法概念の説明を欠いて趣旨が不徹底のうらみがのこること、コンピュータ言語の章では、もともと性質のまったく異なる人間の言語と比較してもどれほど著者の論旨の補強になるのか疑問なこと等を別にすれば、この書は、行動主義の専横に違和を覚えてきた人々に対し、新たな角度から問題の概観を提供する、好個の啓蒙書と申せましょう。

しかし賛辞を呈するばかりでは書評はつとまりませんので、以下せいぜい論争を試みましょう。というのは、著者の立場が（ありあわせの呼称によるなら）典型的な生物記号論（わけても記号進化論）であるのに対し、もう一方に文化記号論なる有力な立場があり、両者は簡単に相容れないと思われるからです。著者がこの書で試みた記号論の、ありうべき問題点を指摘できるなら、ともすればすれ違いがちないずれの立場にも、また当面の記号学的发展にとっても、有益と信ぜられます。

紙幅の制約もあり、評者は3つばかりの論点を簡潔にとりあげます。

第1に、著者の意味と記号の概念は（少くとも文化記号論と較べ）いちじるしく拡張されたものですが、それに見合う収穫によって記号論の奥行きを増すものか疑問です。

著者の定義を拾うなら、まず意味とは「生物が自らの立場から捉えた環境の秩序の体系」(p. 10)です。また記号とは、概念もしくは「意味を表わすもので」(p. 161)、知覚と異なり「いまここにはないものを指示する」(p. 215)ゆえに、生物から生物へ、環境から生物へ、……の「コミュニケーションの役割を果たす」(p. 161)、とされます。こうして、きわめて下等な動物といえども世界を「認識」し「記号」を交信しつつ「意味」の世界に生きるとされます。

紹介される諸事例はもともと、著者のこうした特異な用語と関係なく報告されたものでした。それをどう呼びかえてもよいのですが、現象の恣意的な再分類に終らぬためには、そこに一貫する論理の骨組みを与えなければなりません。

著者はここで、意味・記号領域に内在するある発展傾向の存在を想定します。

この発展傾向が自律的なものだと言えることが、著者の行論にとって重要です。著者はもう一方で、進化論の通説（突然変異と自然選択の理説）に比較的忠実です。この進化のロジックにもとづいて、生物はその行動をより高度に組

織するようになりますが、著者にすれば、これは生物がより豊かな意味世界をもつことにほかなりません。最高度に発達した人間の意味世界もこうした系列のさいごに位置するといえます。そこでもしも意味・記号領域が進化のロジック（これは機械的因果論に近い）に専ら依存し、それに付随して展開するにすぎないとすると、人間の意味世界を考察するにも殊さら原始的な生命のあり方やエソロジーの知見を参照するまでもないことになりましょう。文化記号論を試みるように、人間と動物（自然）の間に線をひき、人間の側（文化領域）だけに記号の理論を構築すれば十分です。

そこで当然、著者は敢えて、生物の営む意味世界から進化のロジックへの逆波及を考えることとなります。すなわち「生命にはその出発点からして、もっと能動的・積極的な原理が働いていたのではないか」(p. 18)、「環境世界の意味が遺伝子にフィードバックしたのだといってよいかもしれない」(p. 61)、と考えるのです。「認識の装置とその働きとは、長い系統発生的発達を経由して、認識する主体と認識される客体との相互作用にもとづいて次第にできってきた……」(p. 113)。「記号には、系統発生的な発達史があるに違いない」(p. 247)。こうした推測は、誤謬とも断ぜられぬかわり、格別の裏付けをもちません。それにこだわれば神秘主義に近づきます。この危うい論理構成の代償は、知覚記号論など著者の展開する所論からみる限り、存外僅かなものにとどまるというのが、評者の判断です。

第2に、著者はこの書で「心理学研究に包括的なオリエンテーションを与えようとする」(p. iii)と言いますが、心理学をどんな方法で再編するのか具体的提案がありません。

著者の整理によると、自然科学はおよそ客観主義的なものであるのに対し、意味は主観的なものです。そこで人間を扱う場合にも「それが意味の問題につながっているならば、自然科学的方法は分析的・還元的であり、意味を見失なうがゆえに不相当である。……意味は分析によって消失する」(p. 285)とされます。もちろん限られた範囲でなら有効な「自然科学を放棄せよというのではない」(p. 284)のですが、では科学をそれと異なるどんな方法で補えばよいのでしょうか。「われわれ心理学者は……意味の世界に住んでいる人間を、その意味もろとも掬いとる方法を探っていかなければならない。」(p. 283)とのべる著者の使命感に共鳴するゆえに、いっそう評者は具体的研究プランについて知りたいと思います。

(評者の見解ではこの方法を与えるものこそ記号学にはかなりません。そしてこれは必ずしも科学と対立しないはずで、意味が主観的なものであっても、それを客観的にとり扱おうとする方針が大切だと思うのですが。)

第3に、著者の記号論は、記号現象の社会制度としての側面に目配りを欠いていて、文化記号論などのアプローチとの関係も不明確な点が気になります。

著者がめざすのはさしあたり心理学の革新ですから、その処方箋が文化記号論と触れあわないとしてもやむをえないでしょう。しかし人間的な意味や価値の領域は、言語や文化のあり方を考えれば明らかなように、社会制度とともに成立しています。ですから、かりに心理学が人間の意味世界に肉迫できなくても、それは自然科学に傾倒したため(ばかり)でなくて、もともと1個の生命体として人間を扱おうとする心理学の、学科分担のせいかわかりません。とすると、折角の処方箋も、意味世界の解明に結びつかないとも考えられます。

もっとも著者は、記号が概念を表示することを明敏に指摘します。人間の抱く概念こそ言語など社会制度と深い関係をもつものでしょう。しかし著者は、制度面にはふれず、記号と概念の系統発生論を試みます。「知覚の世界にも秩序化がみられる。……この秩序への傾向は概念やシンボルの成立によって、その姿を最も明瞭に示す」(p.119)。知覚の秩序は原型ないし図式であって、まだ概念とは異なります。「では概念はどこから出てきたのか」(p.267)、これは「難問」です。著者はいちおう「原型を通じて概念に達する」(p.267)ルートを考えていますが、もう一方で記号(シンボル)の「恣意性」(p.181)を承認しているようですから、こうした上向的理路でその飛躍を埋めきれない道理でしょう。それならいっそ、文化記号論と作業分担をはかるべきではなかったでしょうか。

著者は行動主義心理学をデカルト的機械論、自然科学的客観主義として批判しました。しかし話はそれほど単純でしょうか。人間の最も固有の活動たる言語を、最もうまく説明しているのはさしあたり変形生成文法ですが、これは行動主義言語観と対抗する関係にありながら、多分に機械論的なモデルです。Chomsky 自身デカルト派を標榜してさえいます。

著者は、人間を生命ある存在ととらえかえし、主客の相互作用のなかに措きなおすことによって、意味を考察できると信じた。しかしこれでは、デカルト的接近法を裏返しただけでも言えます。評者としてはむしろ、記号・価値・意味が、主客の構図をこえた集合的な現象として制度的に定在することを

みとめ、それを「科学的」に扱う方法を創出する努力を、代替的可能性として検討すべきだろうと考えます。

評者は、この書を機縁に、記号に関心を寄せる幾流もの人々の間に相互批判と論争の渦が巻き起こることを願い、批判的論点ばかりを連ねました。読者諸賢にはぜひこの書をご一読の上、つぶさに論の当否を判断ねがいたいものです。また著者石原氏には、然るべき折にでも筆を補っていただければ、評者の蒙もひらかれるかと存じます。

(誠信書房、1982年)

(無所属)